



Title	ジャック・マリタンの芸術論における認識対象の問題 : スコラ学的芸術論についての一考察
Author(s)	高岡, 尚
Citation	基督教学, 3, 64-67
Issue Date	1968-07-08
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/46219">http://hdl.handle.net/2115/46219</a>
Type	article
File Information	3_64-67.pdf



[Instructions for use](#)

## ジャック・マリタンの芸術論における 認識対象の問題

——スコラ学的芸術論についての一考察——

高 岡 尙

ジャック・マリタンはカトリックの世界観を持ち、スコラ存在論的形而上学に基づいて、一つの芸術論を持っている。ここでは、それ自身でも大きな芸術論から、認識対象の問題をとりあげて述べたいと思う。

芸術作品に鑑賞者がむかうと、価値ある作品である場合、明らかではないが活潑かつ鮮烈な人間体験を、時空においておびる。作品を構成する物体は、そのように組合わされる以前には、ただの感覚的認識の対象であった。それが今やある限られた時間的乃至空間的連続体における妙有であり、物質とは次元を異にする「生き」をうみ出し、その「生き」は鑑賞者に全体体験をおこす。芸術家が発見し、作品をとおして鑑賞者に与えられるこの体験の原因は何か。聖トマス・アキィナスが、「美」と呼びかつ説明している事柄にもとづくことにより、この体験と芸術活動を理解していく上の有益な作業仮説を得ることが出来る。

- ① *Pulchrum est id quod visum placet.* (*Summa Theologica* I, 5, 4 ad 1).
- ② *sed ad rationem pulchri, pertinet quod in eius aspectu seu cognitione quietur appetitus.* (*ibid.* I-II 27, 1 ad 3).
- ③ *Unde et illi sensus praecipue respiciunt pulchrum, qui maxime cognoscitivi sunt, scilicet visus et auditus*

ratiōni deservientes, ... (ibid. ac supra).

④ Nam ad pulchritudinem tria requiruntur. Primo quidem integritas sive perfectio: quae enim diminuta sunt, hoc ipso turpia sunt. Et debita proportio sive consonantia. Et iterum claritas: unde quae habet colorem nitidum, pulchra esse dicuntur. (ibid. I. 39. 8).

⑤ splendor formae (前掲の claritas と同じ) (Opusculo de bono et pulchro).

⑥ nam et sensus ratio quaedam est. (Summ. Theologica I. 5, 4 ad 1).

美認識は感覚の同伴が必要である場合においても理性の領域に属する。何故なら、美認識における喜びは知的認識行為のある特殊の対象がもたらすものだからである。(①②③④⑤⑥)

美認識は抽象による知識がもたらすものではない。対象を洞察(＝理性に対して認識対象が直接に与えられていること)するとき理性を持つ喜びである。故に、対象の種類にかかわらず、理性が対象の具体的かつ個別的形相を抽象の勞なしに直接把握するとき喜びが生ずる。この対象は美しいものである。(①②⑤)

美が認識されるのは、次の三つの条件が対象において備っているときである。

△充実性√理性は、対象の存在に欠けたところがなく充実のあることを悦ぶ。

△調和性√理性は秩序、統一を悦ぶ。

△明澄性√理性は、わかりやすさを好む。即ち、対象の具体的個別的形相が明白にわかることは、理性の喜びのものである。(④⑤)

美認識の条件である洞察行為は、人間理性にとっては、可感物を可感的な領域であるかぎりにおいて感覚認識する場合だけに可能である。(②⑥)

人間の感覚認識は、非理性的動物の感覚認識と同級であるような純粹感覚ではない。人間にあつては、感覚自身が

理性の働きを帯びている。(2)(6)

被造物は神の創造により存在する。だからいかなる被造物も創造者の持つ無限の力量、知性の業に応わしい存在内容を持つ。特に製作者の知性の痕跡は著るしい。④⑤で指摘される $\wedge$ 充実性 $\vee$  $\wedge$ 調和性 $\vee$  $\wedge$ 明澄性 $\vee$ を無限の豊かさにおいて備えている。もし人間理性が被造物の内実あるいは具体的個別の本質といわれるものを洞察することが出来ると仮定したらどうであろうか。人間理性は、無限知性がつくった秩序、調和、充実の妙のかぎりない高さ豊かさを経験し、自分の本源である神の知性のうちに再び己れを見出す悦びを持つであろう。知性的によく配列された物質の上に知性の反映を見、悦ぶ時と同じである。

しかし、この存在論的内実の神秘は、感覺的認識と抽象作用にたよる人間理性には閉ざされた世界である。聖トマス・アクィナスも、この原理にもとづかねばならぬ人間認識の貧困を強調する。人は「存在するといふことがいかなることか」について完璧な洞察認識を持つことが出来る。しかし「何が存在しているか」については、一匹の虫についてさえ殆どの事を知らない。人は可感的現象のもとにあるものについて、規則的、巨常的な僅かの手がかりにもとづいて、しかも、それ自身決して不変不動性を保証できない普遍概念を持ち得るだけである。

ところが、人間歴史が始って以来、ある特殊の人々が、普通の人間ではわからない不思議な認識を持ち、通常の手段では表現出来ないため、特殊の言語、音響、形、色彩、動きを用いて明確化する努力をつづけている。聖トマス・アクィナスが芸術を理解し、芸術家を愛していたかどうかは大した問題でない。が、聖トマスは、そのような知的行為の可能性乃至事実を彼なりに認識していた。聖トマスによれば、普段の人間の認識行為においては、存在の外皮、存在を示す印し、それをとおしたむこうにこそ、我々の用事が存在しているのだ、とばかりみなされている世界。いわば我々自身と、我々がかわり合うべき世界との間にあるうすいスキ間にこそ、人間理性の自然的認識にとつての唯

一の存在洞察が可能な場が開けている。即ちそれは、人間の感覚器官をとおして、感覚器官によって認識されうる範囲にある限りでの可感世界である。色彩、形、空間、音、これらは無数にあり、互いに無限の関係をとり結んでいる。しかも、三次元空間のどの点に人間の眼、耳が置かれるかによって、その無限根は別次元的に増す。しかも、そのどの一つにも神の無限知性による無限の内容、 $\wedge$ 充実性 $\vee$  $\wedge$ 調和性 $\vee$  $\wedge$ 明澄性 $\vee$ が秘められている。

我々はこの世界を、理性がむかうべき世界への中途として受け取るから、理性の力はつねにこの世界のむこう側でしか働かされつけない。しかし感覚的情緒と共に、この中途で理性を解放出来る自由な魂は、むこうへの途中で留る。中途で遊んでしまうのである。何故なら理性化された感覚(⑥)とでも言える能力が、突然に、可感である限りの可感世界の神秘の豊かさを洞察してしまふからだ。この魂は存在の充実感にひたり吸収するだけで、言葉に表わすことが出来ない。その中途の世界の構造を直視出来てしまふからである。くりかえすことになるが、この観想にあって、この魂は決して、この中途の世界をむこうの世界との関係において見たり考えたりすることはない。この中途の世界に内在する論理(ある存在の存在論的必然性のことである。普遍概念の組合わせにおける必然性ではない)の中に住みついてしまふ。

芸術の認識対象がこの様に説明しうるならば、存在者の具体的個別の本質を知ることが哲学なのだから、芸術は、理論的哲学以上に哲学的知識以為であることになる。

以上は、マリタンの芸術論のうち、認識対象の問題を選んで述べたものである。作品活動におけ創造性、芸術家の自個と客体の同時発見、詩的洞察の構造などについては追って機を持つつもりである。

この芸術論が総合的に理解されるとき、現代芸術に自己納得の原理を与える有益な作業仮説を見出すであろう。又キリスト教思想中の精神物質二元論的見方、倫理学にとっても新しい問題提起への機となるであろう。